

日蓮大聖人御書全集

もんちゅうとくいししょう

問注得意抄

新版
1271
ゝ
1272

もんちゅうとくいししょう

問注得意抄

ぶんえい ねん

文永6年（'69）

がつ にち

5月9日

さい と き じょうにん

48歳 富木常忍ら3人

と き にゅうどうどの

土木入道殿

にちれん

日蓮

きょうめ あ

ごもんちゅう

よし

うけたまわ

そうろう

おのおのごしよねん

今日召し合わせ御問注の由、承り候。各々御所念の

さんぜんねん

いちどはなさ

み

うどんげ

あ

ごとくならば、三千年に一度花き菓なる優曇華に値えるの

み

せいおうぼ

その

もも

くせんねん

さんど

え

とうほうさく

身か。西王母の園の桃、九千年に三度これを得たる東方朔が

こころ

いちご

さいわ

なにごと

ごせいばい

こうおつ

心か。一期の幸い何事かこれにしかん。御成敗の甲乙は、

お

さきだ

うつねん

かいはつ

しばらくこれを置く。前立って鬱念を開発せんか。

けんじつごぞんち

ただし、兼日御存知ありといえども、駿馬にも鞭うつ

しゅんめ

べん

ことわり

あ

こんにち

ごしゅつし

こうてい

のぞ

のち

理これ有り。今日の御出仕、公庭に望んでの後は、たと

ちいん

ほうばい

む

ぞうごん

とど

い知音たりといえども、傍輩に向かつて雑言を止めらるべ

りようほうめ

あ

とき

ごぶぎようにん

そちん

じよう

よ

し。両方召し合わせの時、御奉行人、訴陳の状これを読む

とき なにごと

ごぶぎようにん

おんたず

な

ほか

いちごん

の剋、何事につけても御奉行人の御尋ね無からんの外、一言

い

をも出だすべからざるか。

てきじんとうあつこう

は

おのおのとうしん

たとい敵人等悪口を吐くといえども、各々当身のこと、

いち にど

き

さんど

およ

とき

一・二度までは聞かざるがごとくすべし。三度に及ぶの時、

かおかたち

へん

そげん

い

なんご

もう

顔貌を変ぜず、麤言を出ださず、軟語をもつて申すべし。

おのおの いっしょ どうはい わたくし

「各々は一処の同輩なり。私においては全く遺恨無し」

よし もう おんとも ぞうにんとう よ よ きんじ

の由これを申さるべきか。また御共・雑人等に能く能く禁止

くわ けんか い

を加え、喧嘩を出だすべからざるか。

しよさつ つ がた こころ

かくのごときこと、書札に尽くし難し。心をもつて

ごしんしやく きようげん い おそ そんな

御斟酌あるべきか。これらの矯言を出だすこと、恐れを存

ぶつきよう ぎようじゃ だんな さんじそうおう いちじ

すといえども、仏経と行者と檀那と三事相応して一事を

じよう ぐげん い きようきようきんげん

成ぜんがために、愚言を出だすところなり。恐々謹言。

ごがつここのか にちれん かおう

五月九日 日蓮 花押

さんにんおんちゆう

三人御中